



令和7(2025)年度 病害虫発生予報 第4号

令和7(2025)年7月18日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

高温性の病害虫の発生増加に注意しましょう。

予想期間7月下旬～8月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稻 紋枯病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量は平年並（ほ場率：平年比75.7%、株率：平年比23%）(±)。
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は平年並か少ない(～±)。
- (3) 対策 ・ 薬剤を散布する場合は、穂ばらみ期～出穂期に株元によくかかるようにモンカットフロアブル(F:7)等を散布する。ただし、例年より早くから発生が見られ、発病株率が高い場合や病斑の上位進展が激しい場合は、薬剤散布を2回行うようにする(1回目散布：幼穂形成期～穂ばらみ期、2回目散布：穂ばらみ期～出穂期)。

2 水稻 斑点米カメムシ類(クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ、イネカメムシ、ホソハリカメムシ、アカスジカスミカメ、イネホソミドリカスミカメ)

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根拠 ・ 7月上旬の雑草地等すくい取り調査での発生量は多い(捕獲頭数 平年比：211.5%)(+)。
・ 7月上旬の水田すくい取り調査での発生量は多い(捕獲頭数 平年比：233.3%)(+)。
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は平年並か少ない(±～+)。
- (3) 対策 ・ 早植コシヒカ리의出穂期は県平均で7月21日と前年より早い見込みであるため、適切な時期に防除する。
・ 斑点米の発生を抑制するため、出穂期7～10日後頃(穂ぞろい期～乳熟初期)に液剤で防除する。その後も発生が多い場合は7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。なお、イネカメムシの発生地域では、不稔を抑制するため出穂期に液剤による防除を行う。
・ 周辺より出穂が早い、または遅い品種・作型では、被害が集中しやすいため防除を徹底する。
・ 斑点米カメムシ類の誘引源となる水田内のイネ科雑草、ホタルイ等を防除する。
- (4) 備考 ・ [令和7\(2025\)年度植物防疫ニュースNo.8](#)、[令和7\(2025\)年度病害虫発生予察注意報第2号\(水稻・イネカメムシ\)](#)、[令和7\(2025\)年度病害虫発生予察注意報第3号\(水稻・斑点米カメムシ類\)](#)、[イネカメムシの薬剤感受性検定結果](#)、[病害虫防除のポイント No.16](#)、[No.23](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

3 いちご(育苗) 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量は平年並（ほ場率：平年比158.3%）(±)。
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は平年並か少ない(～±)。
- (3) 対策 ・ 本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗期の防除を徹底する。
・ 予防を主体に、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・ 胞子の飛散を防ぐため、点滴チューブの使用等、水のはね返りのない方法でかん水する。
・ 発病株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理(罹病残さを肥料袋等に詰め、空気を排出して口を閉じ、日当たりの良い野外に放置する)後に処分する。
- (4) 備考 ・ [植物防疫ニュース No.10](#)、[病害虫防除対策のポイント No.21](#)をHPに掲載中。

4 いちご(育苗) ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量は平年並（ほ場率：平年比112.9%、株率：平年比90.5%）(±)。
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は平年並か少ない(±～+)。
- (3) 対策 ・ 本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗期の防除を徹底する。
・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、必ずRACコードの異なる薬剤をローテーション散布するとともに、抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤を活用する。
- (4) 備考 ・ ハダニ類は葉裏に寄生するため、薬剤散布時は葉液が葉裏に付着するように散布する。
・ [ナミハダニ\(いちご\)の薬剤感受性検定結果](#)をHPに掲載中。

5 だいず・野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ フェロモントラップへの誘殺数はやや多い (+)。
現在の発生量はいちごでやや多い (ほ場率： 平年比 475%) (+) が、きく、なす及びトマトで少ない (-)。
向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (±~+)。
- (3) 対 策 ・ 葉裏をよく観察し、早期発見に努める。
・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちにトルネードエース DF(I:22A) (だいず、いちご、トマト、ナス等) やマッチ乳剤(I:15) (いちご、トマト、きく等) 等で速やかに防除する。
・ 抵抗性発達防止のため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・ 施設開口部に 4 mm 目合以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。
・ 卵塊や分散前の幼虫は、寄生葉ごと摘み取り、発生源とならないように適切に処分する。
-

6 だいず・野菜類・花き類 オオタバコガ

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ フェロモントラップへの誘殺数はやや多い (+)。
・ 現在の発生量はトマトで少ない (ほ場率： 平年比 0%) (-)、なすで多い (ほ場率： 平年比 406.1%) (+)。
・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (±~+)。
- (3) 対 策 ・ 新しい食害痕や虫ふんを目印に早期発見に努める。
・ 食害痕等を発見したらプレオフロアブル(I:UN) (だいず、いちご、トマト、なす、きく等) やヨーバルフロアブル(I:28) (いちご、トマト、なす) 等で速やかに防除する。
・ 薬剤の浸透性を高める展着剤の利用が有効である。
・ 施設開口部に 4 mm 目合以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。
・ 摘除した果実や脇芽に幼虫が寄生していることがあるため、残さはほ場の外へ持ち出し、発生源とならないように適切に処分する。
・ 発生ほ場では、土中に残る蛹を殺すため、栽培終了後、速やかに十分耕耘する。
-

7 なし ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い (ほ場率： 平年比 290.9%) (+)。
・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (±~+)。
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、必ず RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布するとともに、抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤を活用する。
・ 天敵製剤の活用や土着天敵の保護利用に取り組む園地では、天敵に影響のある薬剤の使用をできるだけ控える。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ\(園芸作物\)の薬剤感受性検定結果](#)を HP に掲載中。
-

8 りんご 斑点落葉病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い (ほ場率： 平年比 202.1%、株率： 平年比 233.3%) (+)。
・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (-~±)。
- (3) 対 策 ・ 予防を主体に、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・ 発生が見られた場合、スコア顆粒水和剤(F:3)等の治療効果の高い薬剤を散布する。
-

9 果樹類 果樹カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **平年並**
- (2) 根 拠 ・ フェロモントラップへの誘殺数はやや少ない (-)。
・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (±~+)。
- (3) 対 策 ・ 4 mm 目合以下の多目的防災網で園全体を被覆し、被害を防止する。
・ 山林に近い園地や過去に被害の大きかった園地では、飛来状況を特によく観察し、発生を確認した場合は速やかに捕殺するとともに、薬剤散布を行う。
- (4) 備 考 ・ 気温および湿度の高い日には、夜間の飛来量が増加するおそれがあるため注意する。
・ [令和 7 \(2025\) 年度植物防疫ニュース No. 7、チャバネアオカメムシの薬剤感受性検定結果](#)を HP に掲載中。
-

10 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
水稲	いもち病	やや少	やや少	なし	黒星病	平年並	平年並
	縞葉枯病	平年並	やや多		ナシヒメシクイ	やや多	多
いちご	アブラムシ類	平年並	やや多	りんご	褐斑病	多	やや多
トマト	コナジラミ類	やや多	多		ハダニ類	少	やや少
ねぎ	アザミウマ類	平年並	やや多	きく	ハダニ類	やや少	平年並

【 季節の病害虫防除対策 】

○ほ場内外の除草は害虫防除の基本です！

- ・野菜類や花き類では、ほ場内外の雑草はハダニ類やコナジラミ類、アザミウマ類、アブラムシ類の温床となります。適切な除草で、害虫が発生しにくい環境を作りましょう。

○定植前・定植時の防除の徹底

- ・いちご、トマト、きゅうり等の施設栽培では、定植前～定植後にかけて、施設内に病害虫を「入れない・持ち込まない」対策を徹底しましょう。
- ・定植時の苗に対する薬剤処理（粒剤・灌注剤等）によって、施設への害虫の持ち込みを防止しましょう。
- ・施設開口部への防虫ネットの展張によって、コナジラミ類やアザミウマ類等の微小害虫、ハスモンヨトウやオオタバコガ等のチョウ目害虫の侵入を防止しましょう。
- ・イチゴ炭疽病やイチゴ萎黄病、トマト黄化葉巻病（タバココナジラミ媒介）、キュウリ黄化えそ病（ミナミキイロアザミウマ媒介）等の施設内での発生・まん延を防止するため、定植時に感染が疑われる苗は適切に処分し、健全苗の定植に努めましょう。

○トマト黄化葉巻病（TYLCV）の防除対策

- ・TYLCVはタバココナジラミによって媒介されます。夏秋トマトで黄化葉巻病が発生したほ場では、残さに寄生している媒介虫を施設外に「出さない」対策を徹底しましょう。

○うめ・もも・すもも等 クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）

- ・クビアカツヤカミキリが樹木に寄生すると、幹や枝から、レンガ色でうどん状のフラス（幼虫が排出する、木くずと糞が混じったもの）が大量に排出されます。うめ、もも、すもも等の樹木からフラスが出ているのを見つけたら、農業総合研究センター防除課まで御連絡ください。
- ・[令和7（2025）年度植物防疫ニュースNo. 5](#)を当センターHPに掲載中です。

○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・本県のトマトでトマトキバガによる被害が確認されています。茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成されます。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変した外観となります。果実では、幼虫がせん孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空いて腐敗します。ほ場内をよく観察し、疑わしい虫や被害を見つけた場合には、適切に薬剤防除を行いましょう。
- ・[令和7（2025）年度植物防疫ニュースNo. 3](#)をHPに掲載中です。

○かんしょ サツマイモ基腐病

- ・本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和7（2025）年7月現在、全国36都道県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。
- ・健全な種苗の導入及び発病株の早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
- ・[サツマイモ基腐病に注意！](#)を当センターHPに掲載中です。

【 農薬の安全使用等 】

○農薬危害防止対策

- ・6～8月は「[農薬危害防止運動](#)」の実施期間です。
- ・農薬は適正に保管・管理しましょう。
- ・農薬容器のラベルに記載された内容を確認して使用し、農薬による事故等の発生を防ぎましょう。
- ・薬剤散布の後には必ず作業内容を記録し、防除履歴を作成しましょう。

○薬剤抵抗性発達の抑制

- ・薬剤で防除する際には、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

○有用生物への影響に留意

- ・花粉媒介昆虫（ミツバチ、マルハナバチ）や天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

1か月気象予報（予報期間7月19日から8月18日 7月17日気象庁発表）

期間中は、気温がかなり高くなる見込みです。降水量は平年並か少なく、日照時間は多くなるでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10	30	60
降水量	40	40	20
日照時間	20	30	50

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）でもご覧になれます。

～栃木県からのお知らせです～

6月～8月は、「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。



- ・安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ・いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！
- ・農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！
- ・周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう！
- ・農薬散布のその後に！ 防除器具の洗浄も必ず行いましょう！